「出題の意図」

選抜区分	２０２１年度　（選抜区分：一般前期） 法学部　　（科目名：小論文）
出題の意図 **（評価のポイント）**	（１）課題文選択の背景 出典は、田中輝美『関係人口をつくる:定住でも交流でもないローカルイノベーション』(【課題文1】)及び「[地域支える関係人口](下)複数の地域で人材共有」2019年5月27日　読売新聞社(【課題文2】)である。これらは、近年、日本の人口減少に歯止めがかからない中、とりわけその減少が著しい地方(農山村)の維持と活性化の対策として、総務省など国の各官庁をはじめ、各界で注目を集めている「関係人口」について記したものである。 【課題文1】で筆者は、特に農山村地域の人口減少傾向に着眼し、人口減少が地域の住民の意識と「誇り」を失わせることを指摘しつつ、近頃の「新しい潮流」である若者の「田園回帰」志向が起こっていることに言及する。この田園回帰志向の若者が、これまでの U ターン者や I ターン者と異なり、「ソーシャル」(利他性、公共性)の価値観を持つ者として、翻って今後の農山村を支える人材として筆者は期待を寄せる。 とはいえ、筆者は、これまでの農山村地域側のいわゆる人口対策のレパートリーは、“移住・定住”(定住人口対策)か“交流・観光”(交流人口対策)の 2 択だったことの限界を提示する。そこで、筆者は、「第三の道」として、「関係人口」に農山村などの地方の隘路を切り抜ける可能性を見出している。 「関係人口」とはまだ学問的にも実務的にも確定された概念ではない。そこで、本題を解く 1 つの材料として、【課題文 2】に、地方の取り組みや関係人口の態様、そしてそれが地方にもたらす効用面と課題面を情報として示した。 【課題文1】と【課題文 2】でともに示される重要なポイントは、移住・定住という、これまでの有限の人材の取り合いであるゼロサムゲームの負の面を回避しつつ、単なる行きずりの“客”とは違い、1 人の人間がいくつもの地方との有機的関係を形成する、一種のポジティブサムゲームを地方間にもたらし得るという新しい点である。関係人口概念は、これまでの地方の活性化対策の発想法に根源的な変更を迫るものだともいえる。 関係人口は現在進行形の概念であり、おそらく受験生が初めて触れる可能性があるものだからこそ、古くから議論され続けてきた理論等に依拠するテーマと比べて、文章読解力はもちろんのこと、文章から具体的な事象を理解し、整理する能力を求める問いでもある。そうした特徴を踏まえつつ、本問は、「関係人口」とそれが唱えられる現代的な社会的背景を理解した上で、その可能性に関して、自分の意見を展開できるかどうかを問うことが出題のねらいである。 (2)受験生に何を望むか 受験生には、まず、【課題文1】から、関係人口とは何かを筆者のいう「新しい潮流」とその生かし方について、これまでの農山村などの地方が当然視してき

	たレパートリーである移住・定住人口（対策）と交流人口（対策）の限界に言及しながら、関係人口の特徴を適切に理解し、まとめる能力が求められる。 　そして、【課題文1】と【課題文 2】から、関係人口の可能性と限界を指摘し、実際農山村がそれに期待することに関する賛否の立場を明らかにした上で、その理由について、自分の言葉で、論理的・説得的に論述する能力が求められる。